飯舘村までいな復興計画
～Heartful Plan for Restoration in Iitate Village～
農学国際特論Ⅰ / 東大GCL・GDWS (B)
6班：今井 美里・今福 貴子・倉本 潤季・鈴木 心也・平林 凌太朗・武藤 静
GCL: 糸永 順子
指導教官：溝口 勝　教授
林 直樹　特任助教

まえがき

豊かな自然に恵まれた美しい村「飯舘村」に放射能の雨が降ってからもうすぐ３年が過ぎようとしている。いまだに復興のビジョンが描けない困難な状況下において飯舘村はこれから先、どう歩んでいけばよいのだろうか。また自分たちには一体なにができるのだろうか。

本報告書は、東京大学大学院農学生命科学研究科農学国際専攻「農学国際特論Ⅰ」のおよび東京大学ソーシャル ICT グローバル・クリエイティブリーダー育成プログラムのメンバー7 名が現地で村民にインタビューしたこと､感じたことをもとにディスカッションを通じて、我々なりの復興計画案を模索したものである。

本報告書が復興の灯りとなって頂ければ幸いである。

執筆担当者

今井　美里	農学国際専攻	国際森林環境学研究室	修士１年
今福　貴子	農学国際専攻	国際動物資源学研究室	修士１年
倉本　潤季	農学国際専攻	国際森林環境学研究室	修士１年
鈴木　心也	農学国際専攻	国際情報農学研究室	修士１年 (GCL)
平林　凌太朗	農学国際専攻	新機能植物開発学研究室	修士１年
武藤　静	農学国際専攻	国際森林環境学研究室	修士１年
糸永　順子	学際情報学府	社会情報学コース	修士１年 (GCL)

指導担当教員

溝口　勝	農学国際専攻	国際情報農学研究室	教授
林　直樹	農学国際専攻	国際情報農学研究室	特任助教

目次

まえがき 2

1　背景 5

1.1　震災前の飯舘村 5

1.1.1　飯館村の地理・歴史 5

1.1.2　飯館村の産業 5

1.1.3　飯舘村の人口 6

1.2　震災後の飯舘村 7

1.2.1　放射線被害 7

1.2.2　避難区域指定と避難 8

1.2.3　除染 10

1.2.4　ふくしま再生の会 14

1.2.5　“までい”とは？ 15

2　目的と方法 17

2.1　本稿の目的と意義 17

2.2　本稿の構成と方法 18

3　結果とまとめ 19

3.1　現地見学 19

3.1.1　菅野宗夫さんのお宅周辺の見学 19

3.1.2　バスでの村内見学 22

3.2　インタビュー調査 25

3.2.1　震災前の飯舘村を振り返る語り　（付録表 1 参照） 25

3.2.2　現在の飯舘村と自身を取り巻く状況に関する語り　（付録表 2 参照） 25

3.2.3　将来の展望に関する語り（付録表 3 参照） 26

4　提案 28

4.1　コミュニティ×産業 28

4.2　までいな復興計画 29

4.2.1　目指すのは原状復帰（震災前の）なのか 29

4.2.2　拡大飯舘村の創出―或いは想像的（イマジナリーな）飯舘村 29

4.2.3　今後の飯舘村における産業の可能性 30

5　感想 35
5.1　今井美里 35
5.2　今福貴子 36
5.3　倉本潤季 37
5.4　鈴木心也 (GCL) 38
5.5　平林凌太朗 39
5.6　武藤静 40
5.7　糸永順子 (GCL) 41
6　付録 42
6.1　インタビュー調査結果 42
6.2　グループの軌跡 45
7　参考文献等 48
8　あとがき 50
9　謝辞 50

1　背景

1.1 震災前の飯舘村

1.1.1　飯舘村の地理・歴史

飯舘村（いいたてむら）は、福島県相馬郡内に属し、福島県内の地方区分である浜通り・中通り・会津のうち、浜通り地方の北部に位置し、緑豊かな自然に恵まれた面積 230.13 km^2 という広大な地域を有する。村の中央を新田川とその支流、北部を真野川とその支流に沿って農地が広がり、美しい田園風景が広がる亜高原地帯である。また、村は、1956 年の誕生以来、半世紀以上にわたり市町村合併を経ることなく存続しており、2004 年には、合併しない「自主自立」の村づくりを採択した。

1.1.2　飯舘村の産業

飯舘村内の産業別就業人口は、それぞれ第一次産業 28.0%、第二次産業 38.5%、第三次産業 33.5%であり、全国平均である第一次産業 4.0%、第二次産業 23.7%、第三次産業 72.3%と比べて第一次産業の割合が圧倒的に高く、第三次産業の割合が低いのが特徴である。特産品としては、飯舘牛・御影石・高原野菜・花卉（トルコギキョウ・リンドウ）・山キノコ・おこし酒・大吟醸飯舘・そば焼酎「山中郷」・どぶろく[1]などがある。高冷地でたびたび冷害に襲われてきた経験から、多角化による経営の安定を図ってきた。第二次産業としては製造業 4 社のほか、縫製、建設企業の事務所が立地していた。第三次産業はその育成と振興が課題であり、総面積 230.13 km^2 のうち 74.4%を占める山林の豊富な自然資源を生かした観光化が進められていた。

[1] 飯舘村は 2005 年に県内初のどぶろく特区認定を受けている。

Table 1 飯舘村の産業別就業人口 (平成 22 年)

第1次産業	第2次産業	第3次産業
(28.0%) 876人	(38.5%) 1,202人	(33.5%) 1,045人
一人当り分配所得(22年)		
1,678千円 県下57位		

引用[1]：http://www.fksm.jp/youran/075647.html

Table 2 飯舘村の土地利用 (平成 22 年)

土地利用 【全面積:23,013ha(100.0%)】			
水田	1,431ha (6.2%)	畑	1,122ha (4.9%)
宅地	85ha (0.8%)	山林	17,114ha(74.4%※うち国有林47%)
牧場	159ha (0.7%)	原野	1,665ha (7.2%)
その他	1,437ha (5.8%)		

引用[2]：http://www.iitate-madei.com/village01.html

1. 1. 3　飯舘村の人口

震災前の飯舘村の人口は約 6300 人、人口密度は 28 人/km^{2}であった。村では昭和 30 年をピークに年々人口が減少し、過疎化及び少子高齢化が急速に進行してきた。国立社会保障・人口問題研究所が震災前の平成 20 年に実施した人口推計によると、平成 47 年の飯舘村の人口は 4,551 人、そのうち、年少人口は 517 人、老年人口は 1,779 人と推定されている。

また、震災後の 2013 年 11 月 1 日地点で人口は 5920 人、世帯数は 1653 戸であり、震災により、人口減少は加速している。

Table 3 飯舘村の人口

区分	人口	うち15歳未満人口	うち65歳以上高齢者人口	世帯数	うち高齢者単身世帯数
7年国調	7,586人	1,506人	1,534人	1,743世帯	47世帯
12年国調	7,093人	1,175人	1,788人	1,757世帯	75世帯
17年国調	6,722人	994人	1,888人	1,740世帯	103世帯
22年国調	6,209人	792人	1,865人	1,734世帯	130世帯
24年3月末住基	6,336人	743人	1,838人	1,948世帯	

引用[3]：http://www.fksm.jp/youran/075647.html

1. 2 震災後の飯舘村

1. 2. 1　放射線被害

2011 年（平成 23 年）3 月 11 日 14 時 46 分 18 秒、マグニチュード 9.0 の東北地方太平洋沖地震が発生し、福島第一原発の北西 30～45km に位置する飯舘村は、震度 6 弱（観測地点：伊丹沢地区）で、地震動そのものによる被害は他地域との比較の上で極めて軽微であったが、地震とそれに伴う津波によって引き起こされた福島第一原子力発電所事故（東京電力）の影響は深刻なものとなり、震災直後は、飯舘村全域が、放射線量が年間積算 20mSv に及ぶと推定された。2013 年 12 月 25 日 14 時 23 分現在でも、小宮地区で空間線量 5.92μSv と高い放射線量が観測されている。
(http://fukushima-radioactivity.jp/ [4])

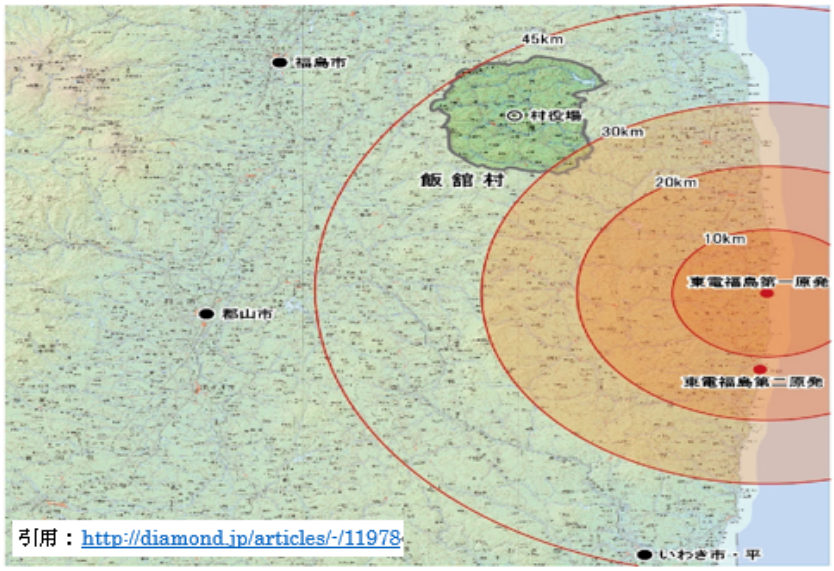


Fig. 1 福島県飯館村周辺地図 [5]

1. 2. 2　避難区域指定と避難

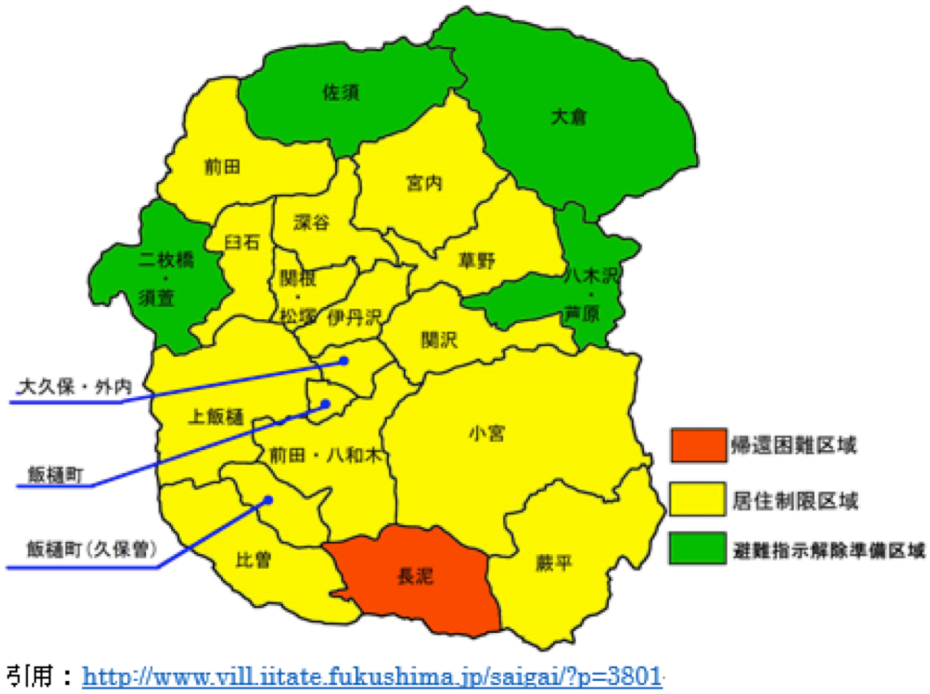
2011 年 3 月 31 日、国際原子力機関（IAEA）は飯館村の土壌から、1 平方メートル当たり約 2 千万ベクレルの放射性物質（ヨウ素 131）を検出し、「避難の必要がある」と指摘したが、経済産業省原子力安全保安院は、「避難区域の拡大にすぐ繋がるかは分からない」「もう少し検討する」との方針を示した。

4 月 11 日午前、政府は半径 20km の同心円ではなく、モニタリングの結果に基づいて精緻な分析を進めた上で避難区域を拡大するという方針を示し、午後には飯館村全域が「計画的避難区域」に指定された。5 月下旬までに順次避難することが指定された。

5 月 15 日から、乳幼児や妊産婦のいる世帯を手始めに、月内に約 5000 人の村民を避難させる計画が始まった。村は、1 ヶ月かけて約 1000 戸の避難先を確保したが、必要数の約半分であった。避難先の確保が難航し、5 月 31 日地点で村民約 6200 人のうち 1427 人が残っていた。6 月には 9 割の住民の避難が終了した。

6 月 22 日、飯舘村役場には福島市役所飯野支所へ役場の機能を移転し、開所式を行った。

2012 年 7 月 17 日、政府は飯舘村の要請を受けて、放射線量に応じて 3 区域に見直す方針を決めた。図 2-2 のように被曝放射線量が年 50mSv を超える地域は、原則として立ち入り禁止が禁止される「帰還困難区域」、年 20mSv 以下の「避難指示解除準備区域」、年 20mSv 超 50mSv 以下の「居住制限区域」に再編した。



引用：http://www.vill.iitate.fukushima.jp/saigai/?p=3801

Fig. 2 飯舘村の避難指示区域 [6]

2013 年 12 月地点、飯舘村の避難状況は下表のようになっている。

飯舘村内は原則全村避難対象であるが、老人福祉施設が行政の許可を得て運営を継続しており、現在の入居者は 78 人（74 戸）になっている。また、国勢調査に基づく飯舘村の現住人口は 5920 人（1653 戸）である。

Table 4 飯館村の避難状況（2013 年 12 月地点）

	避難人数	避難戸数
福島県外	485	289
福島県内	6123	2825
飯舘村内	78	74
全合計	6698	3180

（出所：飯館村ホームページより筆者作成）

1. 2. 3　除染

1. 2. 3. 1 除染方法

福島第一原子力発電所事故によって放出された放射性物質のうち問題視されている放射性セシウム 137 (^{137}Cs) は放射線を出す能力である放射能が半分になる期間 (半減期) が 30.17 年 (国立天文台, 2013) である。汚染された地域を復興させるためには、汚染された場所やものを取り除いたりする除染作業が不可欠である。特に農地土壌の除染が大きな課題となっている。

農地土壌における除染で、除染効果を確かめるために除染前後で放射性セシウム濃度の鉛直分布を測定することが重要である。現在は採取土壌を持ち帰り、分析を行っているが多大な労力と時間がかかる上、分析後の汚染土壌の処理についても考える必要がある。そこで簡易的に現地で測定可能な土壌放射能測定器が開発された (鈴木ら, 2013)。

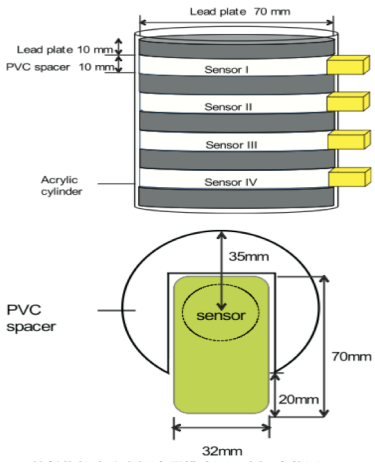


Fig. 3　土壌放射能鉛直布測定器の概要図

農地除染の方法は土壌中の放射性セシウム濃度、畑もしくは水田であるかという条件のもとに３つの手法が農林水産省によって示されている [7]。

① 表土削り取り

未耕起圃場の表面の放射性物質を除去する工法。除染効果は高いとされている。除染後の土壌の廃棄に課題がある。

Fig. 4 表土剥ぎ取り［7］ http://www.maff.go.jp/j/nousin/seko/jose

② 水による土壌撹拌・除去

放射性物質を多く含む細粒土のみを効果的に除去する工法。表土削り取りと比較すると除染後の土壌を削減でき、表土が撹乱されている地点でも可能。高濃度の放射性物質を含む土壌や排水の処理が問題である。

Fig. 5 水による土壌撹拌・除去［7］ http://www.maff.go.jp/j/nousin/seko/jose

③ 反転向

放射性物質を多く含んだ土壌上層と未汚染である土壌下層を反転させる工法。除染後の処理を要する土壌が発生しない。土壌の状態によっては適用不可の場合もある。営農再開後の土壌の肥沃さや耕起の深さに課題がある。

Fig. 6 反転向 [7] http://www.maff.go.jp/j/nousin/seko/jose

1. 2. 3. 2 除染実証実験

2011 年 4 月 12 日、福島県の調べで、浪江町と飯館村の計 8 ヶ所でコメの作付け制限の基準（土壌 1kg 当たり 5000Bq）を超える放射性セシウムが検出された。飯館村は同日、その年の農産物すべての作付けをしないと決議した。

4 月 22 日、政府によって飯館村を含む、放射性物質が基準値を超えて含まれる水田でのイネの作付け制限が発動した。

5 月 28 日、農林水産省と福島県は土壌中の「除染」の実証実験をスタートさせた。▽重機による表土の剥ぎ取り▽水田に水を入れ、土を砕く「代かき」をし、排水時に放射性物質を吸着▽セシウムを吸い上げる効果があるとされるひまわりなどの栽培、以上 3 つの方法を試した。

8 月 20 日、独立行政法人「農業・食品産業技術総合研究機構」の農村工学研究所（農工研、茨城県つくば市）は水田の土に残った放射性セシウムを除去す

る実証実験を始めた。固化材を用いて、表面からセシウムを含む数センチの厚さの土を固め、農機で剥がすという方法である。

9 月 28 日、飯舘村は村内の除染計画を公表した。住環境は約 2 年、農地は約 5 年、森林は約 20 年で終え、作業で出た放射性廃棄物は村内の国有林にコンクリート製容器に入れて仮置きすることなどを盛り込んだ。

11 月 7 日、環境省は、国が除染する警戒区域と計画的避難区域での詳細な放射線量調査を始めた。居住地を中心に詳細な空間線量分布図を作り、除染実施計画の策定に役立てる。
（2012 年 2 月 24 日に中間報告が行われ、2011 年 11 月 7 日～2012 年 1 月 16 日の調査の結果、飯舘村などでは年 20mSv 以下の地域が比較的多かった。）
12 月 7 日から、自衛隊による除染活動が本格化した。本格的な除染を前に、今後の除染活動の拠点とするため、高圧洗浄機や金属ブラシを用いて、飯舘村役場の除染が行われた。22 日、地上 1 メートルの空間線量は飯舘村役場の芝地で毎時 4.39μSv から 0.96μSv に 78%低下したと発表された。26 日、自衛隊は原子力災害派遣から撤収した。

2013 年 11 月 30 日地点での除染作業の進捗状況は、表 2-4、図 2-5 のようになっており、当初の計画に比べて、大幅に遅れている。

Table 5　飯舘村内染作業の進捗状況（2013 年 11 月 30 日地点）[8]

https://josen.env.go.jp/area/details/iitate.html

	実施率	実績量 対象数量
宅地	7%	約120 約1,700 ※
農地	2%	約520,000m² 約22,000,000m²
森林	3%	約470,000m² 約14,000,000m²
道路	0.6%	約19,000m² 約3,200,000m²

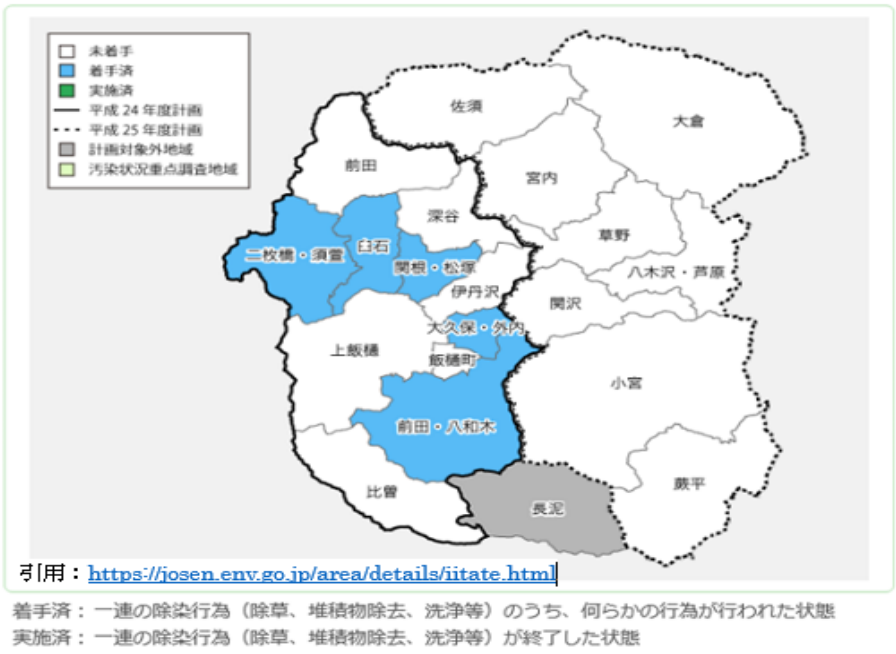


Fig. 7 飯舘村内地区ごと除染作業の進捗状況（2013 年 11 月 30 日地点）[8]

1. 2. 4　ふくしま再生の会

“若者の力、シニアの経験を集め世界の被災地「ふくしま」へ“ をコンセプトとして掲げ、原発事故による被災地および被災者の復興を目指す団体である[9]。2011 年 6 月に福島県飯舘村佐須を拠点として設立し、2013 年 3 月 28 日時点で 222 名を数える会員は、元研究者、現役研究者、飯館村の住人、元行政関係者等、多様なバックグラウンドを持つ (横川ら, 2013)。

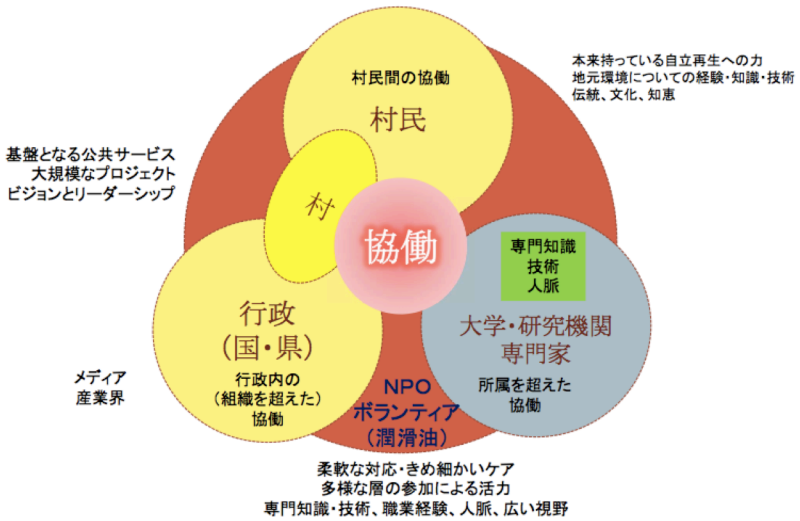


Fig. 8 プロジェクトの組織概要図［10］

ふくしま再生の会は住民、行政、それらにかかる村、さらに大学等の研究者や専門家とのコネクションを円滑にかつ強固にする働きをしている。

主な活動内容としては、放射線量および環境モニタリング、放射能分析、除染、さらに情報発信である。特に情報発信については、一部マスメディアによる信憑性の欠けたものではなく、実測定による信頼性の高いデータや知見を日本のみならず世界に発信しており、影響力も大きい。

このように飯舘村の復興を模索していく中で、ふくしま再生の会の存在価値は何にも代え難い。

1. 2. 5　“までい”とは？

1. 2. 5. 1 までいの定義

までい：左右に揃った手を意味する真手（まて）の方言。
「丁寧に」、「大事に」、「思いやりをもって」という意味 (菅野, 2011)。

1. 2. 5. 2 までいライフ

飯舘村において、自然環境、生活環境、経済活動を含めたトータルシステムの中で営まれる 21 世紀の暮らしのことである。過剰な都市化とは異なり、「地産地消や心の豊かさ」を目指す生き方 (菅野, 2011)。

までいライフを実現するために「までいライフ宣言」として以下の 5 つの宣言が掲げられている [11]。

宣言 1　人と地域の繋がりを“までい”に
私たちは暮らしの中で、豊かな自然を四季折々に感じ、隣近所の顔が見えて、時には助け合い、励ましあいながら生きています。都会で生活する人の目からみればまさにスローライフなのかもしれません。それは私たちが暮らしの中で、結(ゆい)と呼ばれる地域の支え合い等を通じて、村固有の歴史風土と人やものとの 密接な繋がりを大切にしてきたからです。“までいライフ”では私たちの暮ら

しをより“までい”にすることにより、私たちの暮らしと飯舘村に流れる時間・人・ものの繋がりをしっかりと守り育て、それを村の誇り・財産とします。

宣言２　からだと大地を“までい”に

“までいライフ”は、健康があってはじめて成り立つものです。また、田畑や森林、河川など、大地にとっても健康は大切なことです。心とからだや大地の“健康”は、飯舘村の中で、私たちの暮らしと自然が深い関係を持ちながら循環することで維持されています。村民一人ひとりの心と体の健康、私たちの暮らしとともに ある田畑や豊かな自然環境を、生態系の中で守り育て、村民のからだと大地の健康を保つ循環型の仕組みを構築していきます。

宣言３　家族の絆を“までい”に

地域を構成する基本単位は家族です。個々の家族が幸せであることが、飯舘村全体の“までい”な暮らしに繋がります。家族の「助け合い、補い合い」の関係に加えて、夫婦・親子が「活かし合い、高め合う」ことのできる家庭づくりに努めます。

宣言４　「食」と「農」を“までい”に

人間の生命の源は「食」であり、それを生産する「農」です。生命の安心・安全を自らの手で守れることは地域の大きな強みです。暮らしの中で常に「食」と「農」と深く関わってきた私たちですが、ふだんの生活の中で、より農的な暮らしを実践し、村民が「食」や「農」、あるいは「農的文化」と積極的に関わりを 持つことによって、生命産業である農業をしっかりと守り育て、普遍的な持続力を持った地域づくりを進めていきます。

宣言５　人づくりを“までい”に

飯舘流のまでいな暮らしは、村の財産である村民一人ひとりが集まり、お互いにその存在を認め合い、支え合える土壌の上に成り立つものです。
私たち村民が、豊かな知性と感性を身につけ、お互いに尊敬し合える心、支え合う優しい心、たくましい創造力、好奇心旺盛でチャレンジ精神に富んだ人間を、家族や地域ぐるみで見守りながら育て、また自分自身も地域の中で成長していく。そんな、人づくりを飯舘村の誇りとして大切にしていきます。

2　目的と方法

2. 1 本稿の目的と意義

本稿は 2013 年 10 月から 2014 年 1 月にかけての東京での講義および文献調査と 2013 年 11 月 29 日から 30 日にかけての飯舘村を中心とした福島県での実地実習の総合報告書である。本稿の目的は飯舘村における「までい」な復興計画を考えることである。前述のように「までい」とは現地の方言で「丁寧」などを表わす言葉であるが、ここでは「（たとえ時間がかかっても[2]）地元の人たちの状況や思いを尊重した計画を策定する」という志向性の下、この言葉を報告に冠している。本稿は上述の通り、自分たちが目にした今の飯舘村の姿、膝を突き合わせた飯舘の人々のことを思い浮かべながら、「少しでも地域の人たちの生活や『復興』に役立つものを作りたい」という思いの下編まれたものである。そして、2 日間という現地滞在期間において、我々としては調査に尽力したが不十分な点もあるかもしれない。そのような状況で筆者らが目指したのは、むしろ自分たちの「外部者性」を十全に活かすことである。外部者だからこそ見えることや言えることは内部者のそれとは違っているはずで、「異物」として外部者が闖入することで内部にも何らかの「刺激」を生み出すことができるのではないかと考えた。本稿の目的は、何やら俯瞰的で抽象的なモデルを構築することでも、地域の文脈に根ざした具体的な方策を提案することでもない。本稿の目的は、起爆剤となることであり、もって地域の中で、あるいはもう少し大きなスケールで具体的な復興に向けての取り組みが活発化することに資することである。

[2] 「時間がかかっても」丁寧に実行するということと、「時間をかけてじっくりと」実行することはベツモノであり、ここでは「可能な部分については迅速に、しかし性急にならずに時間をかけて実行する丁寧さを許容する」というスタンスである。

2. 2 本稿の構成と方法

復興を論ずる際には、いかにして復興するか（＝How）という具体的な方法論が取りざたされがちであるが、何を復興するか（＝What）を明確にすることが重要である（福田[1924]2012）。そこで本稿ではまとめとして「何を」復興すべきか、という点について試案を提示することを目指す。この際、「復興」を単に震災前の状態を復活させることではなく、関 (2013) が指摘するように住民自身が自由に選択できる「life」を再・創出することとして定義する。すなわち、選択肢の一例を―なるべく外部者だからこそ提案できる形で―描き出すことを目指すものである。

飯舘村での現地実習では、村の人から飯舘村に対する様々な思いをうかがった。本稿ではそれを①震災前の飯舘村を振り返る語り、②現在の飯舘村と自分自身を取り巻く状況に関する語り、③将来の展望に関する語り、④その他の 4 つに分けて、自分たちなりに村の人々の思いを整理し、まとめようと試みた。

飯舘村における聞き取りは、2013 年 11 月 29 日から 30 日にかけての 2 日間、9 人の飯舘村民に対して行った。以下、本稿ではそのうち 20 代から 30 代の男女 3 名と､60 代から 70 代の男性 3 名からの聞き取り結果を主にまとめる。他 3 名については聞き取りの時間が短かったため、結果及びまとめでは「その他」の人々としてまとめた。

3　結果とまとめ

3. 1 現地見学

ここでは飯館村の見学の結果を順に示す。(見学日:2013 年 11 月 29 日(金))

3. 1. 1　菅野宗夫さんのお宅周辺の見学

1．　菅野宗夫さんのお宅

菅野さんのお宅は「ふくしま再生の会」の飯舘村本部として使用されていた。家の中にはパソコンや機械が並びデータベースとなっている部屋があり、外側には風向きや気温、降水量などを測定する装置がつけられていた。

村民全員に配られているタブレット端末もありテレビ電話や村からのお知らせを受け取れる。しかし効果的な利用はほとんどなされておらず、線量変化の様子などは紙に印刷して配布されているという話だった。

また、家の前には「再生の灯」という川の水力によってともる小さな灯もあった。

Fig. 9 村民用タブレット

２．　大気収集装置

村内には大気収集装置が設置されている。この機械は大気中の塵を収集し空気中の放射線濃度を測定するものである。普段は 0.03 ベクレル/㎥ほどで空気中にはそれほど放射能が含まれていないことがわかる。しかし、風の強い日などには数値があがるとの話だった。

Fig. 10 大気収集装置

Fig. 11 装置内部

３．　真野川

菅野さんの家の前を流れている川。
震災前はヤマメやイワナ、アユ釣りなどができ、下流では投網漁が行われていた。
現在は大雨で放射能を含んだ土砂が流れるのを防ぐ仕組みの研究を東大の農学部が進めている。

Fig. 12 真野川

４．　農地

菅野さんは田、畑、ビニールハウスを有し、震災前は農業を行っていた。

田や畑の周りは獣害を防ぐための電気柵で囲まれていたが現在は電気が通っておらず、ビニールハウスも使われていなかった。

訪れた際には既に刈り取られていたが、ふくしま再生の会と東京大学との連携で稲の試験栽培が行われている。刈り取った稲は基準値以下にも関わらず、土の下にすき込んだとお話されていた。

初期 Cs 濃度を変える実験や泥水流し込み法の実験なども行っており、温度や湿度などを測るセンサーなどがみられた。

Fig. 14 菅野さんの圃場

Fig. 13 実験用のセンサーなど

3.1.2　バスでの村内見学

続いてバスで飯館村を見学した。

１．虎捕山山津見神社

山で仕事をする人の神様が祭られている。九州からも例大祭に訪れる人もいたほどの大きな神社だったが、震災後の火事により焼失し、廃殿になってしまった。周囲の村民はこの神社の氏子が多かった。

２．仮仮置き場

除染によって剥ぎ取られた土を積む作業が行われていた。放射能を含むパックを積んだ山を最終的に放射能含まないフレコンバックで覆って積んでいた。

未だ置き場の問題が解決していないため、仮仮置き場が村内各地に点在しており、その場所として平らで使いやすい優良な農地が使用されている。

作業員はゼネコン関係者ならびに下請け業者で、作業服にマスクという姿で作業を進めていた。村内ですれ違う多くの車は作業員の乗ったものであった。

除染作業は国がゼネコンとともに行っている事業だが、村内の 20 地区のうち菅谷地区１地区のみ村民によって除染が行われている。平地の除染は進められているが、飯館村の土地の 75%は山であり、その除染方法はまだ確立されていない。

Fig. 16 積まれたフレコンバック

Fig. 15 除染作業の様子

３．飯館村役場とその周辺

導入で述べたように震災前飯館村は経営の安定していた自治体であった。そのため役場は非常にきれいだった。現在は飯野町に仮役場が作られ、こちらの役場では１０人ほどの職員が交代で働いているとの話だった。外には名産である花崗岩でつくられた石碑や、地蔵がある他、線量計が設置されていた。

Fig. 18 村役場　外観

Fig. 17 村役場　石碑と地蔵

Fig. 19 村役場　線量計

近くには老人ホームもある。入居者は震災前 120 人いたが、高齢で移動することが困難なため現在も 80 人がそこで暮らしている。未だに 100 人が入居を待っている。しかし、老人ホームのスタッフは村外へ避難しており、震災で辞めてしまった人もいるため深刻な人手不足に陥っている。
役場の隣には本屋もあったが震災の影響で営業をやめてしまったそうだ。

４．見守り隊

バスに乗車中すれ違った車の中に見守り隊がいた。
見守り隊とは村内の防犯活動を行うために結成された組織で国の緊急雇用創出基金事業を活用して運営されている。24 時間 3 交代制で村内のパトロールを行っている。

５．長泥のゲート

Fig. 20 長泥のゲート

線量の高い長瀞地区へは 2012 年 7 月以降住民以外への立ち入りが禁じられ、このようなゲートが作られていた。
簡易線量計で計測したところ２～７マイクロシーベルト/時間ほどの線量があり、山側に近づけると８マイクロシーベルト／時間ほどの数値が観測された。それまでの数値に比べると比較的高い値が観測された。

3. 2 インタビュー調査

3. 2. 1　震災前の飯舘村を振り返る語り[3]（付録表 1 参照）

このカテゴリーに分類される語りからは、以下のような飯舘村に対する思いが窺える。第一に、飯舘の自然は生活の一部であった・自然は飯舘の宝・マタタビやキワダを山から取ってきて漢方にした、といった、豊かな自然とそれを利用しながら営まれてきた飯舘の暮らしに対する肯定的な思いである。この際、飯舘の暮らしが農業のみならず山林からの非木材林産物 (NTFPs) の採取などを含めた生態系全体に依存していたことは後述する現状の復興及び除染活動に対する住民の不満を考える上で重要である。第二に、時間にゆとりがあった・手間をかける時間のよさ・安心感・地域内の結束といった便利ではないがむしろそれを楽しむ余裕のある生活に対する肯定的な思いが挙げられる。それは、現在の避難先である都市部での生活と対比的に語られる。第三に、少子高齢化や過疎・農業以外の産業がなかった・若い人は村外に働きにでる、といった村が以前から抱えていた社会経済的問題に対するやや否定的な見解である。

3. 2. 2　現在の飯舘村と自身を取り巻く状況に関する語り（付録表 2 参照）

現在の状況に関する語りからうかがえるのは、第一に国が主導する除染への不満である。除染の意味を見いだせない・学者不信・住民の声を聴かずに除染しているといった語りが見られる。第二には、先行きの不安によるストレス・「生き甲斐」がない・具体的な方向性がない、といった先行きの不透明さに対する不安である。特に「生き甲斐」という言葉は複数の人が繰り返し口にしていたが、将来の飯舘村での産業復興の不透明さや・避難先での生活がどれほど続くかわからないという具体的な困難が「生き甲斐」という抽象的な言葉に集約されていることが印象的であった。第三には、一人一人考え方は違うためそのフォローが重要・帰る人と帰らない人がお互いに気を遣いあってしまっている・戻るつもりがないのにお金を受け取っている人に対して憤りを感じる、といった帰村する／しないという対立に起因する周囲の人との不和が挙げられる。

[3] 注意すべきは、これら「飯舘村の良さ」についての語りは、すべて現在から過去の暮らしぶりを振り返ってなされたものだということである。現在彼らが飯舘の外で生活していることを考えると、この中には—誤解を恐れずに言えば—幾分ノスタルジーが含まれていることは想像に難くない。

このような不和を招いた一因として、飯舘村の内部で避難指示解除準備区域・居住制限区域・帰還困難区域という三つの区分ができてしまったことがあるとの指摘もあった。

3.2.3　将来の展望に関する語り（付録表 3 参照）

飯舘村と村民自身の将来の展望に関する語りをみると、その内容は主に「帰村」に関するものと「村の未来像」に関するものであった。ここではその 2 つに関する村民の意識を 3.2.1・3.2.2 で挙げた過去及び現在の飯舘村の状況に対する村民の認識や思いとも関連付けながらまとめ、そのなかで、飯舘村の復興について考えるうえで重視すべき要素について検討した。

3.2.3.1 「帰村」に関する村民意識

帰村に対する考えは、個々の村民間で大きく異なっていた。今すぐに帰りたい・来年にも帰りたい、という語りがある中で、これから家族を持つことを考えるとすぐには帰れない・帰るのは仕事を終えてから・他の地域で土地を得た人はもう帰らないだろう・同級生のうち帰りたいと言っているのは 5, 6 人というように今すぐには帰村しない・できないという村民も多いようだった。このような考えの違いは、3.3 で述べたような村民間の不和を生み出す要因ともなっていると言える。そういった状況に対して震災後みんながばらばらになっていくことが不安だという声もあった。一方で、故郷への様々な思いやつながり方を大事にできるように・帰村する人としない人で気持ちを共有すること、という語りに見られるように、全員での帰村が現実的に難しいということを受け入れつつそれに対応していこうという姿勢も多く見られた。1 章で取り上げた「までいライフ宣言」において「人と地域の繋がり」を大切にすることが第一に挙げられていたように、飯舘村という地域と村民との繋がりは非常に重要な要素であるが、全村帰宅制限地区にある現在において、今までのようにリアルな地域コミュニティをプラットフォームとして人と地域のつながりを考えていくことは難しいと考えられる。このような状況から、個々の自由な選択を認めつつも人と地域との繋がりを失わない

よう、今までとは異なった方式や手段によって地域コミュニティの維持を図っていけるような復興の在り方の重要性が示唆される。

3. 2. 3. 2 「村の未来像」に関する村民意識

村の未来像に関する語りを見てみると、元に戻るのが復興ではない・新地域づくりの必要性・新しく生きていく農村になる、といったように、単純に震災前の状態を目指すのではなく、新しい形で未来像を描いていくことが必要であるという見解が全体を通して見られた。これは 3.2 で挙げられた、村が以前から抱えていた社会経済的問題に対するやや否定的な見解を踏まえたものであると考えられる。また、具体的なビジョンに関しては、麻を産業として利用したい・観光型農業は必ず成功する・企業誘致を行いたい、といった語りに見られるように、村の未来像について産業ベースで考えている人が多く見られた。1 章でも述べたように、飯舘村は震災前の状況を見ても少子高齢化が進んでいる村であり、復興を行うのであれば元の村に戻るのではなく、新たな産業を軸に活性化を図れるようにする必要があることは明らかであろう。では、どのような産業を推し進めていくべきであろうか。村民が村で行いたいと考えている産業としては農業分野に関する言及が多く、長い年月飯舘村の主要産業であった農業への強い想いが感じられた。その一方で、飯舘村での農業はコストが高かった・生産性が低かったという意見や、以前は農業以外に産業が無かったことに対する批判も見られた。また、原発事故によって放射能汚染されてしまった農地ですぐさま農業を再開することは行政の規制等も存在するため困難であることから、今後も農業を中心として村の産業を進めていくことは現実的とは言い難く、第一次産業にとどまらず第二次、第三次産業も踏まえて考えていく必要があるだろう。さらに、村で行いたい産業について個々人はそれぞれ意見を持っているものの、村全体を視野に入れたうえでの産業の在り方について、まとまった意見は出ていない。これは、3.3 で挙げられた先行きの不透明さに対する不安とリンクしているのではないだろうか。帰村後の生活のイメージが描けない・共有できないことが、先行きの不透明感につながっているとも考えられる。このような先行きの不透明さを解消するためにも、飯舘村全体の復興後の産業の在り方について、具体的かつ現実的なビジョンを示すことが重要であると考えられる。

4　提案

4. 1 コミュニティ×産業

飯舘村の復興のためには「コミュニティの維持」と「産業の育成」を念頭に置いて考えていく必要がある。そこでコミュニティと産業は独立した要素ではなく、相互に密接に関係していると考えられる (Fig. 21)。

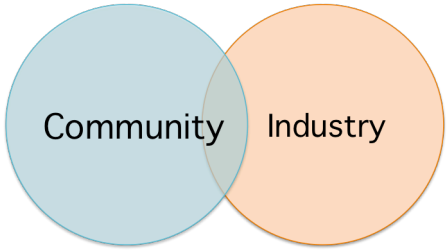


Fig. 21 コミュニティ×産業のイメージ

すなわちどちらが欠けていてもコミュニティおよび産業という要素が円滑に動作することは困難であると考えられる。「コミュニティの維持」と「産業の育成」の両側面を考慮した施策を打つ必要がある。

4. 2 までいな復興計画

4. 2. 1　目指すのは原状復帰（震災前の）なのか

導入及び 3.2 で述べたように飯舘村においては震災前から長期にわたって人口減少の傾向が表れていた。また、震災前の飯舘村在住者の第二次・第三次産業就業人口 2,247 名に対し、村内での非農林漁業従業者数は 1,500 名であり[12]、仮に村外からの従業者が全くいなかったとしても約 3 分の 1 が村外で就業していたということになる。震災後、村内に安定して収入が得られる職場がなければ居住が可能になっても以前からの住民の帰村の動機は向上せず、人口やコミュニティの回復は困難である。また、通常、コミュニティ（地域共同体）は、誕生や死亡、生活状況の変化などによってメンバーの入れ替えを伴う。コミュニティとはメンバーが固定した人のグループのことではなく、多様な人々を抱える器といえる。原子力発電所事故により新たな就農を促すことが現時点では困難な中、コミュニティとしての飯舘村を再生することは、多様な産業を育成し、震災前からの住民だけではない新たな住民の移住もしくは就業を促すことといえる。

4. 2. 2　拡大飯舘村の創出―或いは想像的（イマジナリー）な飯舘村

コミュニティを復興するといった際に、飯舘村という器を維持するだけでなく、当然ながらメンバーシップにも言及する必要がある。上でも指摘してきたように、現実問題として帰村する人と帰村しない人がいる中で、飯舘村というコミュニティの問題を論じなければならない。帰村しない人たちの飯舘村への思いを切り捨ててしまっては、排他的な集団になってしまう。すなわち、主に帰村する人たちにとっての空間的な意味での飯舘村と、主に帰村しない人たち[4]にとっての精神的な意味での飯舘村、その双方のつながり方を大事にできるような新たなコミュニティの形を考えていく必要がある。

そこで、空間的には飯舘村という場所にいなくても、飯舘村とのつながりをイマジナリーに担保できるスキームを構築できないかと考えている。空間的・

[4] 将来的にもおそらく帰村しないだろうということを決めているが飯舘村とのつながりを持っていきたいという人たちの他に、（将来的にはわからないが）すぐには帰村しない、という人たちもここに含む。

具体的な意味での飯舘村とは別に、より広く薄く広がるイマジナリーな拡大飯舘村を形成し、それぞれが自分の望む形と濃度で飯舘村とのつながりを維持していく。たとえば、現在村民全員に配布されているタブレット端末を通して配信されているライブカメラ映像を充実させ、バーチャルにつながりを感じる方法がありえる。テレビや一般のスマートフォンなどアクセス可能なデバイスを増やし、自分の家の何某の場所に設置してほしいというようなアレンジを一人一人ができるようにする。

或いは、ふるさと納税[5]のような形で、より緩やかに飯舘村とのつながりを担保するスキームもありうる。ふるさと納税によって、「お金を通して村を支える」という新たな飯舘村とのつながり方を創出する。自身は飯舘村に居を構えていなくても、財政を通して村を支えるという点で、いわば拡大した飯舘村のメンバーシップである。こうしてすぐには帰村しない/できない人たちの飯舘村に対する思いも表現できるスキームを用意することで、お互いの思いを理解し共有するきっかけをつくり、飯舘村というまとまりを再・構築できる。また、現在誰も住民がいない＝収入源がない状態の飯舘村という地方公共団体を存続させていくことは現実的に重要なマターであり、その一翼を帰村しない人たちも担いうるということの意義は大きい。

4. 2. 3　今後の飯舘村における産業の可能性

日本における電力事業はこれまでほぼ地域独占の形態をとっており、運営は企業が行っているとはいえ公器であるといえる。今回事故が起きた福島第一原子力発電所は東京電力[6]の施設でありながら東北電力管内に立地している。そして東京電力はその電力供給対象地域に原子力発電所を一つも立地していない。一方、都道府県別の電力消費量を見ると電力生産地である福島県の消費電力は東京電力の管轄地域全体の約 20 分の 1 である [13]。

[5] ふるさと納税は全国どこの自治体にいても、特定の自治体にお金を納めることができる制度である。寄付という形になるため、2000 円以上の負担については確定申告をすれば控除されるという点も参入障壁の低さという意味ではメリットとなる（総務省 on-line: 000254924.pdf）。

[6] 東京電力の管轄は群馬県・栃木県・茨城県・埼玉県・東京都・千葉県・神奈川県・山梨県・静岡県の一部である。

電力のコストは本来その発電部分だけではなく、維持・管理・廃棄・事故処理をも含むものであり、その点で事故後の復興は東京電力管内で負担すべきものであると考える。飯舘村のコミュニティを再生し、そのための産業振興を考えるにあたってもこの枠組みが起点となる。

現時点ですぐに元通りの飯舘村—農業での土地利用を中心とした—を原状復帰できない以上、別の方法での土地利用と産業振興を検討しなければならない。

第一次産業振興案

事故発生前の飯舘村における第一次産業従事者は導入で見た通り産業別就業人口中の 28%に上っていた。第一次産業従事者は基本的に村内で従事していたと考えられる。年齢や家族構成によって事情は様々であると推察できるが、飯舘村で「住む」「働く」のどちらに重点を置くかによって選択は変わってくる。

「（苦渋の決断ではあるが飯舘村に居住するよりも）農業を生業とする」ことを優先する個人、家族が一定数存在する場合は、北海道などに新飯舘村（奈良県十津川村に対する北海道新十津川町のようなもの [14]）を設け、集団移転後に農業活動を再開する。用地取得や現地との調整は住民の意見を集約した上で行政が代表して行い（費用は上述の通り東京電力管内の電気料金において負担する）、移転先の隣接コミュニティに受け入れられるようにする。福島県飯舘村と新飯舘村は特別な提携契約（条例）を締結し、相互の関係を維持するよう努めることを定める。先進的な ICT を利活用して等身大に面会することができるテレビ会議や AR (Augmented Reality: コンピュータなどによって拡張された現実環境) などで仮想的にではあるが「そばにいる」環境を導入する。移転先における農業は基本的には戸別ではなく農業法人を設立して行い、競争力と QOL (Quality of Life: 生活の質などにより人生にどれだけ幸福度を見いだしているかの尺度)、継続性の向上を図る。数十年が経過したときは飯舘村と新飯舘村の結びつきは弱くなるかもしれないが、移転 100 年を経て 2011 年の台風 12 号被害で新十津川村から十津川村に支援が行われたように、コミュニティの歴史として記録、記憶しておくことは可能だと考える [15]。現代のデジタル化されたアーカイブがその一助となるだろう。

「飯舘村に居住する」「農業を行う（食料生産ということ）」ことについてどちらも選べない場合は、土壌の利用について制限が伴うことになるが、次段

落で述べる方法（野菜・食品工場）を選択肢として検討する。すなわち、飯舘村で農業を行う場合には制限付きになってしまうとおいうことになる。

第二次／第三次産業振興案　電力特区の開設と工場誘致

東京電力の賠償の一部として、電気を供給することで飯舘村を支援してもらえるように交渉し、飯舘村を電力特区に指定する。村内の製造業は電力料金を無料にし、電力使用量の多い工場を誘致する。用地は従来耕作地であったところのうち、おもに休耕地や耕作放棄地であったところを優先的に利用する。

① 特に大型の製造設備を保有する企業で東京電力の電力供給地域に工場を立地する企業を優先する。企業にとっては原価低減により競争力を向上させるインセンティブがあり、飯舘村に技術者を中心とした従業員を移住（転勤）させることによりコミュニティの新メンバーとして迎え入れることができる。飯舘村の位置から、出来るだけ小型軽量で付加価値の高い部品製造などが望ましい。

② 照明や温度管理などで多くの電力を使う野菜工場などの食品工場の誘致および企業育成を行い、屋内生産における徹底した安全管理技術を確立する。スプラウトやキノコ類など、非土壌栽培が管理しやすく、また、様々な新規事業が行いやすい。基本的にはこれまで日本国内で紹介されていなかったような希少野菜を中心に選択し、長距離輸送を行う価値がある品種を検討する。元通りの飯舘村の農業を回復することはすぐにはできないが、屋内かつ土壌を使用しないことで消費者に安心感を与え、かつ、コスト面でも生産者と消費者両方にメリットがある。

この電力特区には可能であれば東京電力管内から送電する。それが現実的でなければ東北電力から供給し、その分の電気料金は東京電力管内の利用者（企業、民生）が負担するものとする。

第二次産業（製造業）が入ることにより第三次産業は必然的に需要が高まり、宿泊や飲食、運輸業、鉄道や産業用道路の延伸などの振興も期待できる。元通りのメンバーによるコミュニティが回復されるわけではないが、飯舘村には新たな社会が形成され、村外に移住した人々もいつでも帰ってこられるところとして再生する。

第三次産業振興案

第三次産業における飯舘村を２つの側面から考えた。

１つ目に、観光客を呼び込み、地域活性化をはかるとともに飯舘村の自然の美しさや豊かさなどに魅力を感じてもらうことである。こうすることにより飯舘村へのＩターンを促進することができるのではないだろうか。また、第三次産業により飯舘村自体の産業育成にもつながると考えられる。

２つ目に飯舘村出身者が故郷に集う機会を提供することである。本調査の結果で言及したように復興のビジョンとして帰村する人と帰村しない人においても、お互いにまでいを持って接することができるような関係および人と人、人と土地のつながりを重視することが明らかとなった。第三次産業は一般に沢山の担い手を必要とするため、地域に雇用機会を生み出し、集いを創出し、コミュニティの形成に繋がると考えられる。

① いいたて復興の灯りプロジェクト

年末に飯舘村内においてイルミネーションイベントを実施する。観光業の効果のみならず、年末に実施することにより飯舘村出身者が故郷に集う機会を提供することができる。さらに、イルミネーションに必要な電力は再生可能エネルギーにすることにより原発によるエネルギーには依存しない脱原発のメッセージを訴える。類似事例として石川県輪島市・白米千枚田では“あぜのきらめき”として太陽光 LED を点灯させるイルミネーション [16]の幻想的な雰囲気が反響を呼んでおり、飯舘村でもこのような取り組みができるのではないだろうか。

Fig. 22 あぜのきらめき [16]

http://www.vill.totsukawa.lg.jp/www/contents/1323932778217/files/sonpou12gatsu.p

② 山津見神社再建およびお祭り

飯舘村にある山津見神社は古くから、産業の神、交通安全の神、海上安全・豊漁の神、良縁結びの神、安産祈願、酒造、狩猟の神など多くの神徳を持っていたこともあり飯舘村民だけではなく、他地域の人々から信仰を集めていた。しかし、2013 年 4 月 1 日に火災が発生し、社殿等が全焼してしまった。そこで山津見神社の再建とともにお祭り等を大々的に行うことにより、再び村民が集う機会を提供するとともに、他地域などか山津見神社へ訪れる人を増加させる。

Fig. 23 山津見神社（2012 年 11 月 3 日時点）[17]

http://jbpress.ismedia.jp/articles/-/38762

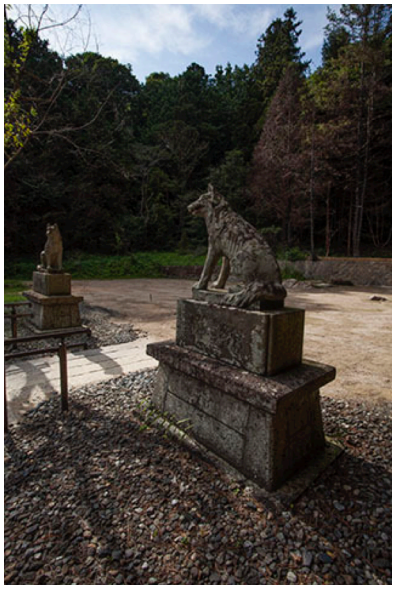


Fig. 24 火災後の山津見神社（2013 月 9 月 1 日時点）[17]

http://jbpress.ismedia.jp/articles/-/38762

5　感想

5. 1 今井美里

実際に飯舘村の様子を見てまず感じたことは、人が住んでいない村だとはとても思えないということだった。地震や津波、またそれに関わる火災の被害を受けた宮城県や岩手県の景色が私の記憶にあったので、避難区域に指定されたところもそのような状態であると想像していた。しかし実際の飯舘村は、見たところ地震で崩れた様子は無く、とてもきれいなところだった。確かに農地に作物はなく雑草が生えていたが、2 年半の間まったく放置されていたのなら、もっと荒れた状態であるはずだと感じた。お話を伺ってみると、地域の方々が定期的に手入れをしていることがわかった。私の出身地は山梨県で飯舘村と同じように自然が多いところだが、農業従事者人口の減少のため耕作放棄地が多く発生しており、中には林のような状態になっている耕作放棄地もある。また山の状態は、飯舘村のほうがずっと手入れがされている印象を受けた。自分のこれまでの生活では、山は近くにたくさんあっても、そこから薪をとってきたり、食べ物をとってきたりすることはあまり経験したことがなかった。だから飯舘村に行って、薪のこたつで暖まったことや、これまで村の人が山や畑をどう使ってきたかという話の内容は私にとって新鮮なことだった。そしてそうやって自然とより深く関わり合いながら生活をしていた人々が故郷を奪われるということは、どういうことなのかを考えるようになった。自然とあまり関わりを持たず生活している自分が故郷や、今住んでいるところを奪われるのとはまた違った苦しみがあるかもしれない。

さらに特に年配の方々は人生の大仕事を終えて、これから村で残りの人生を穏やかに送っていくつもりであったと思う。そのような人々が村を失い、別の地で暮らさなければならないということは、これから人生が始まるような若者の私には想像できないようなつらいことであると感じた。村を訪れる前「何十年後、飯舘村の人々が村に帰り、穏やかに暮らしていくためにはどうしたらいいか」ということを私は考えていた。しかし、この考えは人生も終盤にさしかかった高齢者の方々の気持ちを無視するものであったと気づいた。私たちは長期的な帰村ビジョンと、今すぐに村で暮らしたいと考えている方々の気持ちをどう整理するか、という 2 つの課題について同時に考えなくてはならないのだと思う。

村の方々にお話していただいて、よくわかったことは、自分が感じていた事故から現在までの時間の重さと、飯舘村の方々が感じていた時間の重さは全く違うものだということだった。村の方々の苦しみを知らずに、以前と変わらない生活を送っていることを申し訳なく感じた。

原発事故を起こしてしまい、そして今その苦しみを一部の人々だけに背負わせている日本の社会と、私はこれからどのように関わっていくのかもう一度考え直していきたいと思う。もっと多くの人が村に足を運んで、現実に起こっていることを知り自らの生き方を問い直していくことで、世の中は少しずつ変わっていくのかもしれない。

5.2 今福貴子

私にとっては今回の訪問が３．１１の被災地への初めての訪問でした。被災地の現場に行きたいという思いはあったもののこれまでなかなか動きだせず、特論で飯舘村を訪問するということで、参加を決意しました。

村の景色をバスから眺めて、まず受けた印象は違和感でした。人がいない。車もほとんど通らない。いわゆる”のどかな里山”とは異なる不穏な静けさでした。この違和感はのちほど村内見学をさせてもらって更に強まりました。仮仮置き場につまれた真っ黒な袋の山、そこで働く作業員の姿、立入り禁止のゲート。

一方で、お宅近くの印象は少し違いました。もちろん畑が使われていなかったり、測定機器があったりするものの、家やその周辺はきちんと手入れがなされていて、人もいて、よくよく見なければ普通の田舎の風景だと感じました。

あらためて考え直してみると私がふと感じたこのギャップは、現在の飯舘の縮図に近い気がします。除染や帰村の問題はほとんど進展していない、していても村民の意向とは異なっている、という状況の中で、村民が自ら動きだして自分のまわりから少しずつ変えようとしてきている。それを風景の中から垣間見たのかもしれません。

また、今回の訪問では都会に住んでいる私達の感覚がどれほど被災地の現場と離れているのかを思い知らされるお話を数々聞かせていただきました。中でも２つ非常に心に残っている言葉があります。

一つ目は菅野さんの奥さんの「もう疲れました。」です。その言葉を述べられたあとに堰を切ったようにお話されていた姿が印象的でした。ずっと我慢を強いられ、自らを鼓舞し家族のために気丈に振る舞われてきた奥さんの叫びのような気がしてなりませんでした。

二つ目は佐藤まきさんの「キタナイ」です。その日一緒に見学した飯館村に向けられたものでした。幼いころから育ってきた飯館村。そんな飯館が好きで、将来は絶対に帰りたいといっている彼女にこのような言葉を言わせてしまう現状とはなんなのかと思ってしまいました。

現場をみて、みなさんの生の声を聞いたあとで、いかに遠い場所から考えていたことが無責任だったかを反省しました。

1回の訪問で何かがわかるわけではありませんが、それでも今回の訪問によって私の中での原発事故や被災地に対するイメージは変わりました。来るだけがボランティアではない、という菅野さんの言葉もありましたが、なかなか訪れることが出来ない中でも私や私の周りで風化させないようにしていきたいです。今回の報告書と発表が何か少しでも意味のあるものにしたいと思います。

5. 3 倉本潤季

すこしおかしな言い方だが、日本人として震災のこと、そして今現在も復興が進まず「震災」がまだ終わっていないことから目をそむけてはならないし、何らかの形で関わっていかなければならないと思い参加した。しかし、現地ではたとえば自らの2011年3月11日からの時間感覚の甘さを思い知らされたりと、現実の「厳しさ」を見せつけられた。自分自身は「まだ2年」と思っていたわけではないが、「もう2年」といったときの「もう」に込められた思いの重さは想像すべくもないほどだった。

自らの無知と無力を知らされる一方で、「よそ者」だからこそ—ある種無責任に—感じられる潜在能力のようなものを、僕自身は飯舘村で見てくることができたと思っている。たとえば飯舘の山林は人の手が今も入っているためにとてもきれいな状態だったし、マラソンコースがあるのなら参加者一人一人に線量計を配って「除染マラソン」を開催する手もある。「マイナスからのスタート」という言葉がとても印象に残っている。しかし、震災前の「プラス」の状

態を知る村の人たちにとっては「マイナス」の状況でも、よそ者の無責任な眼にはどこも等しく「ゼロ」であるように思えた。この震災というピンチにチャンスを見出す人が出てくるのではないか。

もちろん、今後乗り越えなければならない困難はいくつもあるだろうし、僕が２日やそこら行ったくらいでわかったような気になって「大変だ」などと言えるようなものではないだろう。同じ無責任なら何やら明るい方がいいかもしれないと思った。そうすることで、「よそ者」の存在が少しでも飯舘の人たちのためになればこんなに嬉しいことはない。大変ななかで、東京から来た見ず知らずの若造のために貴重なお話をしてくれた飯舘村の人たちに心から感謝します。

5. 4 鈴木心也 (GCL)

飯館村には以前から自身の土壌放射能測定器の研究で何度か伺ったことがあった。しかし、研究へ注力してばかりいたのだろうか、住民の方々の想いや意見を全力で聞いたことはなかった。そういった背景もあり、今回、「までいな復興計画」を考えるために改めて飯舘村に訪問してみて、様々な年代の方々の飯舘村への想いや考えを聞いているうちに、現在の飯舘村が直面している問題は単に放射性物質によるものだけではないように感じられた。

顕在的には、放射性物質の自然環境中への拡散により、肥沃な農地土壌は汚染され、家畜を飼育することもできず、全村避難区域によりコミュニティが分断されてしまったことなどが問題として挙げられる。確かに原発事故直後であれば、これらの問題さえ解決すれば良かったのかもしれない。しかし、震災から３年が過ぎようとしている飯舘村の復興を考えたときに顕在的な問題を解決すると同時に潜在的な問題も解決していかなければならないのではと思った。おそらく潜在的な問題として、村レベルにおける産業問題や少子高齢化問題、個人レベルでは放射線に対しての精神的な不安やストレスへの取り除いて挙げられるように信憑性の欠けたデータではなく、科学的根拠に基づいた情報発信を行っていかなければならないと考えられる。また、ふくしま再生の会代表である田尾氏は「飯舘村は世界の主要な問題である食糧問題、エネルギー問題、少子高齢化問題を内包しており、飯舘村の復興こそが今後の社会システムのためのロールモデルとなるべきだ。」と話していた。列挙される問題こそ異なる

ものの、飯舘村は放射性物質による汚染問題以外に多くの問題を抱えているとした点には非常に共感できた。

では、これらの問題解決のために私たち学生にできることに何なのであろうか。私はあまり頭で考えずにまず現場に行くことを提案したい。そして、現実に起きていることはネットやテレビで書いてあったり、言ったりしていることと違うことを心で感じて欲しい。そうすることによってにしか本質的な問題解決に必要な新たな発見や考え、想いは生まれてこないと思う。

飯舘村が「マイナスからのスタート」であれば、マイナス状態からプラス状態となり、復興というゴールを達成するその時まで私はこれからも飯舘村やそれに関わる人々の姿や想いを目に焼きつけていきたい。

5. 5 平林凌太朗

今回の講義での飯舘村への訪問が僕にとって、初めての被災地への訪問でした。当初は、「東北の震災問題は日本人として知っておかなくてはならない問題であり、２年半経過した現在の復興状況を見に行こう」という程度の心構えで、飯舘村への訪問に臨みました。しかし、実際に飯館村の様子を見学して、汚染土壌のコンポストが山積みになっている様子、荒れた畑などは、私が新聞記事などから思い描いていた現在の復興の様子とはかけ離れていて、そこで初めて復興は進んでいないという現実を理解しました。

さらに、現地で、復興の様子や、飯館村の方々が感じてきた気持ちを聞かせて頂いて、「私の過ごした２年９ヶ月」と「飯館村の方々が感じてきた２年９ヶ月」の間に想像できない程のギャップがあり、現地の人がどれ程の我慢をしてきたかを想像するだけで、今までの自分の無知と無関心が無性に腹立たしくなりました。自分の無力さでは現状を何も変えられないですが、訪問で感じたこの気持ちを大切にして、今後自分なりに震災問題に向き合って、できることをやって行きたいと思います。

最後に、震災復興の現状・放射線に対する正しい知識を、都市に住む多くの人に知ってもらうことは、被災地の方々の望みです。なので、今回の私たちの発表を通して、より多くの人に興味を持って頂くことで、震災問題を風化させないことを願います。

5. 6 武藤静

このグループに参加するまで、原発事故による被災と復興に関する問題は、自身にとって少し遠い存在だったように感じる。津波の被災地にはボランティアとして出向いたことがあったが、原発事故の被災地には自分が行ったとしても出来ることは無いだろうとも思っていた。確かに、今回飯舘村に出向いて、私自身が復興に貢献できるようなことを出来たわけでは全く無い。しかし、被災地を自分の目で見て本当の現状を知ること、そして被災者の方々の声を聴きその想いを感じ取ることは、たとえ復興には直接繋がらないとしても、大いに意味があることだったと感じている。

そう思うのは、飯舘村を訪れ、村民の方々と話す前に抱いていたイメージと、実際の現状に大きなギャップがあったからである。第一に感じたギャップは、村民にとっての飯舘村という存在の大きさである。何十年も過ごしてきた土地で生活が出来ず、いつ戻れるかも分からないという状態がいかに耐え難いものかという村民の必死の語りを聴いて、生まれ育った「ふるさと」でもある飯舘村の存在は、自分が想像していたよりもずっと大きいものであった。第二に感じたのは、村の「自然」の重要性である。都会に住む私たちにとっては、まずは住環境とインフラが整って生活が出来るようになれば良いと思いがちである。しかし、自然と密接に関わりながら生活が営まれてきた飯舘村では、自然資源の利用についても従来のように出来なければ意味が無いのであった。そのような状況で、農業の再開や山の資源利用について全くめどがついていないという現状は、想像以上に辛いものであると感じた。これらのギャップに私は問題の想像以上の深刻さを感じたのだが、プラスの面でのギャップもあった。それは、多くの人々が可能な限り村に帰ってきて環境の維持・改善を図ろうとしているということ、そして将来の飯舘村のことを真剣に考えている若者がいるという事実である。いつ戻れるか分からないという状況で、村では諦めのムードの方が大きいのではないかと思っていたが、将来飯舘村に戻ることを考えて少しでも今やれることをやろうとしている人たちが少なからず居るということも、一つのギャップであった。

これらのギャップは、実際に村を訪れ、被災者の方々の話を聴かなければ分からなかったことだと思う。除染と復興の問題は政府に頼らざるを得ない面も大きく、私たち一般市民に出来ることは少ないかもしれないが、まずは現場の実状を一人でも多くの人が理解するということも重要なのではないかと、今回

の取り組みを通じて感じた。実際に、私は飯舘村を訪れて以降、原発事故に関する報道をより身近に、より真剣に捉えるようになった。そして、飯舘村の将来のことを本気で考えている人たちに出会ったことで、村の復興を心から応援したいという気持ちになった。震災からもうすぐ３年がたとうとしているが、この３年という年月の長さ、重さにより多くの人々が敏感になることで、復興の勢いも変わるかもしれない。

5. 7 糸永順子 (GCL)

高齢者や家族、農業をはじめとした産業、人間が「開発した」土地・地域をどのようにしていくかなど、飯舘にこれからの日本のアジェンダがすべて揃っていると感じました。

特に、コミュニティをどのように維持し、また再生していくかという問題は、今後全国各地で必ず起こってくるはずの課題だと考えます。ただ、飯舘村ではそれが事故のせいで予定外、予想外に早く来てしまったのだと思います。宗夫さんがおっしゃっていた「飯舘のことを話すことをタブーにしない」という言葉は課題から逃げてはいけない、逃げられないという自覚を私自身に迫ります。

山も生活圏の一部であるという政府のスタッフとの認識の違いについては、私自身も「東京の役人」と同程度の認識しかありませんでした。現地でお話を聞いて初めて気づいた次第です。ふだん、自分の尺度でしかものを考えていないこと、そしてそのことの自覚すらないこと。重い事実です。研究する上でも、また、生活者としても大きなリスクだと思います。

ハウスで変わった野菜を作ろうと思っている、というお話には刺激を受けました。付加価値をつけていくことが重要だと、私も同感です。賠償は当然ですが、その先を考えた場合は補「助」金などいらないような体制を作っていくことは必須だと思います。事故のあと、以前よりも村の将来に対して展望のひらけたプランを作ることを目指すべきではないかと考えます。

簡単なゴールなどないということが分かったことが最大の学習です。

貴重なお話を聞かせていただき、また、様々な重い現実の現物を見せていただきました。どうもありがとうございました。

6　付録

6. 1 インタビュー調査結果

表1. インタビュー調査結果①　震災前の飯舘村を振り返る語り

インフォーマントNo.	内容
1（20代女性）	通学路などの自然が遊び場だった。
2（20代男性）	大部分の人の職場は村外にあった。 震災前から飯舘村の過疎や少子高齢化は深刻な問題だった。 かがみ石という石の採掘が盛んだった。
3（30代男性）	「自然の中での暮らし」が良かった 手間をかける生活の良さ。都会との生活時間の違い。 外から来た人も受け入れてもらえた。 自然は飯舘の宝。
4（60代男性）	自然が生活の一部だった。マタタビ・キワダなどの漢方薬。
5（70代男性）	農業だけでもそんなに生活は厳しくなかったのでは。 麻の利用はあった。身を食べたり草履を作ったり。 昔は結などの地域内の結束がより強かった。 夏は農業、冬は山。米だけでなく、畜産や広葉樹（炭）・針葉樹（木材）の利用も含めた複合的農業だった。 昔は農業一本での生活が可能であったが、過疎や賃金の問題で農業形態も変化。 村の65戸はみんな（村の射程が不明）山津見神社の氏子だった。 薬草の知識があるのは60−70代くらいまでであろう。 若い人たちが外から給料を取ってきて年寄りが百姓という構造。 若い人が祭りなどを主催していた。
6（60代男性）	過疎の村だったが、必ずしも外部者に対して受け入れ態勢でない。 飯舘に帰ってきたときに感じる安心感。 農業の生産性は低かった。 収入に高望みしなければ、ゆとりのある（精神的に）生活ができる。 飯舘には時間があった。ゆとりがあった。
その他	標高が高くコストがかかるので農業は難しかった。 いんげん作り始めて1年で被災。 祭りの時に、山津見神社の参道に住民たちが出店を出した。

表2．現在の飯舘村と自身を取り巻く状況に関する語り

インフォーマントNo.	内容
1（20代女性）	義捐金のせいで、周囲の人の金銭感覚がおかしい。 義捐金をパチンコなどに使ってしまう人もいて許せない。 人とのそれよりも、自分は家や土地との結びつきが大事。 除染の意味が見いだせない。 仮設住宅の生活の質が向上した。（なぜ？） 放射線被害に対する周囲の偏見。 戻るつもりがないのにお金を受け取っている人に対して憤りを感じる。 今村に行くと、汚いと感じる。
2（20代男性）	
3（30代男性）	帰る人と帰らない人とそれぞれに気を遣い合ってしまっている。 今年に入って被災者の苦悩が大きくなってきた。 みんな「見えないものへのストレス」を抱えている。 土いじりしたい。 今のうちから震災の問題に取り組んで、後世に問題を持ちこさないようにすべき。 学者不信。 帰りたい祖母と帰りたくない母の意見の相違。 仮設住宅には畑がないので、みんなプランターで土いじりしている。 除染や帰村の具体的な方向性がないのではないか。
4（60代男性）	牛を安い値段で売らなければならなかった。 原発関連死も増えている。 「生き甲斐」がない。 普段の生活ができない。 住民の声を聞かずに除染をしている。地元に寄り添った形になっていない。 原発被災地のことを話すのをタブーにしてほしくない。 すでに移転や帰還しないことを決めた人も多い。 仮・仮置き場を平らで広いからという理由で優良農地に作っている。この状況のせいで戻ろうとしても意欲がわいてこない。 3種類の区分ができたが、避難解除準備区域の4地区だけ戻ってもしょうがない。 「まだ2年」＝外部者・国と「もう2年」＝地元の意識の違い。 タブレットの情報が充実していない。 7人家族1世帯だったのが避難して2世帯に。 基準値以下なのに試作米を埋めないといけない不満。 科学的データの不足や信頼性の問題で、不安が募っている。 ひとりひとり、心や考え方は違う。それをどうフォローしていくかが重要。 山の資源を利用できないのが辛い。 津波と放射能汚染の復興の進展の差。 ジャーナリストといっても所詮サラリーマン。電話だけで聞き取りを済ませようとする。経験しないと心が通わない。 現場を知ってほしい。 表土はぎとりを行なった田んぼの稲穂は以前の者に比べて穂が細く分蘖も少ない。地力が弱まったせい。
5（70代男性）	過程が見えないことへの不安。 除染完了（まで待って帰村するかどうか？）かどうかは村民の年齢によって違う。 村の懇談会で環境省の人を読んで意見を言うが、何も変わらない。 タブレットについて、過去と比較しやすいデータの見せ方をしてほしい。 若い人は借り上げ（？）のマンションに住んでいるからバラバラ。年寄りは仮設に住んでるからまとまってる。 除染のデータをきちっと示してくれないと、許可（何の？）出せない。 先行きの不安によるストレス。 仮設住宅には顔見知りがいて心強い。 放射線に対する恐怖あまりない。 表土はぎとりによる除染では肥沃な層が捨てられてしまうので、その後の土作りが大変。 最近は畑をやりたいと思わなくなってきた。 飯舘村に戻って生活したいという気持ちも薄れつつある。 便利なところに避難しているから、戻った時に不便な村でやっていけるか不安。
6（60代男性）	タブレットは見ない。テレビとかの方が良い。 良い田んぼの上に汚染土積み上げてる。 除染に対してピンとこないひともおおい。 今の生活も当たり前だと思ってしまえば良い生活。 みんなは自分の考え、自分の行き先を見失ってしまった。自分は自営業でお客さんがいたから見失わなかった。 国の定めた基準値以下でないと土地が自由に扱えない。 若者は避難が長ければ長いほど避難先が便利に思えてしまうだろう。
その他	山の除染が問題。

表3. 将来の展望に関する語り

インフォーマントNo.	「帰村」に関する内容	「村の未来像」に関する内容
1（20代女性）	自分の出身地に帰りたい。 今すぐ帰りたい。昔のように、飯舘村の元の家で暮らしたい。 避難先が第二の故郷になりつつあるから、そこに住み続ける人もいるかも。	飯舘村に残された動物たちを、社会の役に立つような形で保護したい。
2（20代男性）	同級生80人中「帰る」という人は5，6人。 避難区域解除されたら一年以内に帰村したい。	村内の産業は農業だけで、働く人はみな村外で仕事を持つという今までの構造を変えたい。 トヨタウン的な町。 中山間地が生き残るためのモデルになるような街づくり。 「元に戻る」が復興ではないのでは。農作物が作れる、除染ができた、だけでは不十分。 麻の利用。産業用＋バイオ燃料。 企業に飯舘に来てほしい。 若い人が多い、新しい飯舘をつくる。
3（30代男性）	これから家庭（特に子ども）を持つことを考えると、すぐには村に帰れない。 仕事引退したら帰りたい。 故郷への様々な思い、様々なつながり方を構築できるスキーム。 帰りたい人も、帰らない人も、お互いを思いやること。	復興には除染の完了が不可欠。 自分たちがやりたいと思ったことだできる選択肢があるといい。
4（60代男性）	みんなで飯舘村に戻りたい。 外で土地や家を求め、定着する人も。 心のケアが必要。 「世代飛ばし」で帰村。 帰村する人と帰村しない人で気持ちを共有すること。お多大に理解し合うこと。 飯舘村で暮らしたい。	ハウスで珍しい野菜を作る。 新・地域づくりの必要性。 オリンピックの競技が来てくれたらいいなぁ。
5（70代男性）	若い人の無理な帰村は望まない。若い人はおそらく帰ってこないだろう。 地域がまとまっていたが、事故後みんながばらばらになっていかないか不安。 早く帰りたい。	飯舘村に雇用を作りたい。 農業経営がしたい。 企業誘致とそのための環境づくり。 花弁は食べたりするわけではないので、放射線の影響少なく、武器になる。 自立した生活ができないと人は住まない。農業に加え、企業誘致に力を入れたい。 この地域で、この条件でどのような農業をやっていくか考えないとだめ。
6（60代男性）	来年にも帰りたい。	条件がそろえば飯舘でもひまわりやりたい。 頭金あれば花弁栽培やりたい。 観光型農業は必ず成功する。要介護の高齢者をターゲットにして、付添の家族を取り込む。 被災地としてではなく、新しく生きていく農村になる。 ひまわりで観光客引き付けたい。今も伊達でやっているが、飯舘でやらないと意味ないので来年でやめる ここにいたときのようなチームワークを復活。
その他		都市部の人々と交流し、リピーターを得て定住させたい。

6. 2 グループの軌跡

2013/10/25　講義①「農業とソーシャル ICT」（田中秀樹先生）
講義②「までいな農村計画」（林直樹先生）
2013/11/01　第 1 回ミーティング
2013/11/15　第 2 回ミーティング
2013/11/22　講義③「飯舘村の被災と除染」（溝口勝先生）
第 3 回ミーティング
2013/11/29-30　飯舘村訪問
2013/12/06　講義④「グローカル制御について」（原辰次先生）
2013/12/13　第 4 回ミーティング
2013/12/20　第 5 回ミーティング
2014/01/06　第 6 回ミーティング
2014/01/07　第 7 回ミーティング
2014/01/08　第 8 回ミーティング
2014/01/10　農学国際特論 I の講義の中で発表

第一回ミーティング議事録

参加者：今井、今福、鈴木、平林

★これからの方針

前提：30 年後までを見据えた「限定付き主体選択的復興計画」を提案する！

選択肢

■　帰村する

-現在、避難指示解除準備区域の北部地域に限定して帰村する 。

-除染後にすぐに帰村する人、すぐには帰村しないけど 30 年後までに帰村する人、もしくは帰村しない人で補助金等における金銭的な差を作る

■　帰村しない

-農地は森林（天然林）に戻す：

-地熱発電地域にする：うまくいけば効率的には十分だが騒音が問題。ただ人がいないなら大丈夫ではないだろうか 。

-除染費用を住民 1 人あたりに分配：約 4800 万円

第２回ミーティング議事録

参加者：今井、倉本、鈴木、平林

・30 年というタイムスパンで、地域も必要に応じて限定しながら、住民が主体的に選択できる選択肢を第三者的視点から提案する。

・「何の復興か」が重要

→「生活の復興」人と人のつながり、人と土地/場所の関係性、「日常」の復興

→村の維持方策を介したゆるやかな人と土地、人と人とのつながり創出

帰村する可能性を残すプラン、帰村する可能性を残さないプランで場合分けして考える

第３回ミーティング議事録

参加者：糸永、今井、今福、岡本、倉本、鈴木、平林、武藤、横川、渡辺、林先生、溝口先生

【帰村可能性の有無による場合分け】

■帰村の可能性を残す

-「日常の復興」をめざし、個々人が強制されないことが大事

-帰村実現まで、ふるさと納税的な制度によるゆるやかなつながりの創出・存続をはかる

-帰村実現までの「核」としての行政

-資金は、人と人/土地のつながり維持や新規移住者を取り込むための魅力づくりに投じるべき？

■帰村の可能性を残さない

-除染費用を村民に還元すべき

-人の移動を考えると、個々人、地区ごと、村全体等がある

-土地については産業利用すべきか

-産業利用する場合は、国が買い上げて国策として進めるか、基礎自治体が行うか、さらに細かい行政区ごとに行うか（規模が小さいほど住民の意向が反映されるはずだが、事業規模が小さくなってしまう）

→この議論はずれている。村が国に除染を依頼し、国が進めるということでもう進んでしまった。もしこの議論をするならば、合意が進んだ今、どのように除染をやめさせるかから話さなければいけない。これは難しそう。

【私たちには何ができるのか、どう考えているのか】

・あくまで提案する立場に徹する

・（提案し評価する立場に徹する）「～するべき」という語尾は出てこず、「～したら～なるかもしれない」を示す

・気づいたら 30 年後に誰も住めなくなっていた、という状況は避けるべき

・将来、外部からも人が移転してくるような村がいいのではないか→そのために今回の訪問で村の魅力のタネを探す

・現「飯舘村民」のしたいことを具現することを基本目標として具現の際に将来世代に残される選択肢を可能な限り残しておくための方策を考えるべきではないか

第４回ミーティング議事録

参加者：糸永、今福、鈴木、平林、武藤

聞き取りをもとに、報告書の章立てを決めた

第５回ミーティング議事録

参加者：糸永、今井、今福、倉本、鈴木、平林、武藤

聞き取り内容を整理

→震災前の飯舘村を振り返る語り、現在の飯舘村と自分自身を取り巻く状況に関する語り、将来の展望に関する語り、その他に分類

第６回ミーティング議事録

参加者：今福、鈴木、平林、武藤

まとめ作業

第７回ミーティング議事録

参加者：今福、倉本、鈴木、平林、武藤

まとめ作業

7　参考文献等

- 福田徳三著／山中茂樹・井上琢智編([1924]2012).『復興経済の原理及若干問題(復刻版)』. 関西学院大学出版会
- 菅野典雄 (2011)：美しい村に放射能が降った 飯舘村長・決断と覚悟の120 日, pp. 116-117. ワニプラス, 東京.
- 国立天文台編 (2012)：平成25年 理科年表, p.474. 丸善, 東京
- 関礼子(2013).「強制された避難と『生活（life）の復興』」.『環境社会学研究』(19): 45-60
- 鈴木心也, 岩瀬広, 登尾浩助, 溝口勝, 小林大樹, 伊藤哲 (2013): フォトダイオードを用いた土壌中の放射能鉛直分布測定器の開発. 土壌の物理性, 125: 29-33.
- 横川華枝, 溝口勝 (2013): 飯舘村再生を目指す協働の成り立ち—ふくしま再生の会を事例に—. 土壌の物理性, 125: 53-54.

[1] 福島県市町村要覧　産業別就業人口
http://www.fksm.jp/youran/075647.html 参照日: 2013/12/20
[2] いいたて村までい企業組合　いいたて村案内
http://www.iitate-madei.com/village01.html　参照日: 2013/12/20
[3] 福島県市町村要覧　人口 http://www.fksm.jp/youran/075647.html
参照日: 2013/12/20
[4] 福島県放射能マップ http://fukushima-radioactivity.jp/
参照日: 2013/12/20
[5] ダイヤモンド社　福島県飯舘村・現地レポート
http://diamond.jp/articles/-/11978
参照日: 2013/12/20
[6] 飯舘村ホームページ
http://www.vill.iitate.fukushima.jp/saigai/?p=3801
参照日: 2013/12/23
[7] 農林水産省: 農地除染対策の技術書概要
http://www.maff.go.jp/j/nousin/seko/josen/pdf/gaiyou.pdf
参照日: 2013/12/26

[8] 環境省： 除染情報サイト
https://josen.env.go.jp/area/details/iitate.html 参照日: 2013/12/22
[9] ふくしま再生の会: http://www.fukushima-saisei.jp/index.html
参照日: 2013/12/27
[10] 溝口勝 ：
http://www.iai.ga.a.u-tokyo.ac.jp/mizo/edrp/fukushima/saisei/130921/iitate130921.pdf 参照日: 2013/12/27
[11] までいライフ宣言：http://www.iitate-madei.com/life02.html 参照日: 2014/1/4
[12] 総務省.「都道府県・市区町村に対する寄附金（ふるさと納税）について」.
http://www.soumu.go.jp/main_content/000254924.pdf
参照日: 2014/1/7
[13] 総務省統計局「産業（中分類），経営組織（２区分），常用雇用者規模（６区分）別全事業所数及び男女別従業者数－都道府県，市区町村」
http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/GL08020103.do?_toGL08020103_&tclassID=000001008649&cycleCode=0&requestSender=search
参照日: 2014/1/6
[14] 経済産業省資源エネルギー庁および独立行政法人経済産業研究所「平成 24 年度エネルギー環境総合戦略調査・結果の概要」
http://www.enecho.meti.go.jp/info/statistics/regional-energy/data/2013_kekkagaiyo.pdf 参照日: 2014/1/6
[15] 北海道新十津川村ホームページ「開拓史」
http://www.town.shintotsukawa.lg.jp/hotnews/category/252.html
参照日: 2014/1/6
[16] 奈良県十津川村「村報とつかわ 603 号（2011 年 12 月）、6～7 ページ
http://www.vill.totsukawa.lg.jp/www/contents/1323932778217/files/sonpou12gatsu.pdf 参照日: 2014/1/6
[17] 石川県輪島市・白米千枚田「あぜのきらめき」
http://www.semmaida.kuronowish.com/senakari/ 参照日: 2014/1/7
[18] JBPress「失われた古社、山津見神社が見せるもの」
http://jbpress.ismedia.jp/articles/-/38762 参照日: 2014/1/7

8　あとがき

私たちが本プロジェクト「までいな復興計画」により、具体的かつインパクトの大きなものを作成したかったのが本心ですが、その目標には至らなかったと思っています。しかしながら、東京で議論していた案が飯舘村に行って話を聞いてみることで 180 度変わってしまうほど、自分たちが考えていたことと現場ではギャップがあることがわかりました。そして、現場に行ってみることの大切さを学ぶとともに現場の意見を取り入れて思考・行動する難しさを肌で感じることができました。

また、飯舘村での聞き取り調査も 2 日のみであったために、飯舘村民の意見の全体を網羅したものにはなっていません。今後は以上のことを考慮した上で調査し、時間軸に重きを置いた現実的で具体的な復興計画を立案していきたい。

9　謝辞

私たちのグループワークでは、飯館村の菅野宗夫さん、菅野千恵子さん、菅野永徳さん、佐々木敏雄さん、佐藤公一さん、大内香代子さん、酒井正秋さん、佐藤聡太さん、佐藤万姫さん、ふくしま再生の会の田尾陽一さんがお時間を割いて調査に協力してくださいました。協力していただいた皆様へ心から感謝の気持ちと御礼を申し上げます。

また貴重な講義をしてくださった原辰次教授（情報理工学研究科システム情報学専攻）、田中秀樹さん（GCL 特任研究員）に感謝いたします。

2014 年 1 月 31 日